

## シュライエルマッハーの 旧約説教に関する一考察

高 森 昭

はじめに

1. 問題の所在とその必然性について
2. 説教における旧約聖書の個所について
3. 印刷された説教の内容をめぐって

結びにかえて

はじめに

本論文はシュライエルマッハーの旧約説教に関して、「シュライエルマッハーと旧約聖書」というような論議を視野において、広く全般的に取り組むことを意図しているのではない。それについては、これまで数多く論じられてきた。しかし筆者はあえて最近のシュライエルマッハー研究が生みだしてきた成果の刺激を受けて、これまで通念のように見なされ勝ちであった幾つかの点について、訂正ないしは補充の必要を訴え提起したいと思っている。ただその際にあらかじめ主題を全般的に論じたり、また吟味する必要はなく、むしろそれに先立って以下の二点に限定して述べるのが、事柄の性質を明らかにするうえで適切な道筋であると考えている。すなわち、第一にシュライエルマッハーが旧約の個所を、説教のテキストとしてあげているものについて考察することであり、第二にシュライエルマッハーの説教として印刷されているものについて考察することである。この二点は基本的な材料にふれて主題に取り組むことでは共通しており、この限りにおいて筆者は諸業績の批判的な検討を試み、生産的な対論の場を創出したいと願うものである。<sup>(1)</sup>

## 1. 問題の所在とその必然性について

シュライエルマッハーが近代プロテスタンティズムを代表する、神学者・説教家・哲学者であることは言うまでもないが、その旧約聖書との関わりについては、問題なしに受け入れられ得なかったことが、すでに19世紀半ば過ぎに明らかになっていた。その際に特に問題にされたのは、シュライエルマッハーがギリシャ語およびギリシャ思想の理解に優れていた程には、ヘブル語やヘブライズム思想に通じていないのではという点であった。<sup>(2)</sup>

その関連でこんにち特別の注意をはらって検討せねばならないのは、前世紀末頃から今世紀始めにかけてのシュライエルマッハー研究に多大の影響を及ぼした、ディルタイの残した評価である。彼はシュライエルマッハーの伝記を詳細にまとめることに尽力したが、その中で以下のように記している。それはシュライエルマッハーがハレ大学にまなんだ時(1787年-89年)に、神学部の教授であったゼムラーのネオロギー神学およびその聖書批評と関連する敘述において現れる。

「……偉大なるゼムラーの真の協力者であり継承者であったのは、……ゲッチンゲンにおけるミヒャエリスであり、その学派からでた(当時は情熱的な若者として活動した)アイヒホルン(その見事な旧約緒論の業績が18世紀の80年代に開始されたのである)であった。……シュライエルマッハーの神学的な教養の中に幾重にも関わり合う宿命的な欠陥が、彼がハレにおいて、ゲッチンゲンから広がってきた、すばらしい神学運動に疎遠であったことを通して、残されてしまったのである。その結果はずっと後までも彼の批評的な仕事には、真の歴史的な視点とオリент言語の広範な基礎とが欠けており、そのことが更に我々の19世紀における神学の展開に関して、彼を普遍的に位置づけることに決定的とも言うべき結果をもたらしたのであった。……」<sup>(3)</sup>

このような評価が果たしてそのまま受け入れられるものかに関して、これからの検討のなかで、その答えはおのづから明らかとなるであろう。いまそれに取りかかるに先立って、ここでは先ず、こうしたディルタイの判断に対しては

十分に注意深く対処すべきことを述べるに留めたい。シュライエルマッハーがハレ大学にまなぶなかで、旧約の良き教師と出会う機会を持たなかったことが、その神学形成に決定的な欠陥を作る原因であると解釈し、もしシュライエルマッハーがゲッチンゲンに学んでいたならば、結果はまったく別のものになったであろうと示唆する見解自体が、問題をもっていることは言うまでもないからである。しかし筆者がここで指摘する必要を痛感するのは、このようなディルタイの解釈が、あたかも事実であるかのように通念と化し、批判的な検討がそれに対して加えられることが殆どなく、しかも種々な視点からの論議が絶えずくり返されてきた事実である。<sup>(4)</sup> それをシュライエルマッハー研究史の一頁をうめる仕事として採用するのは、許されることではあっても十分な業績として評価することは困難であると言わざるを得ない。シュライエルマッハー新版全集の刊行が進められるなかで、これまで通念の如くに見なされがちであった事柄の是正と再認識は、どのような点に見出されて然るべきであろうか。

近年に発表された諸業績のなかから、ここではシュッテ(1970年)およびプロイス(1980年)の論文に言及してみたい。いずれもシュライエルマッハー新版全集の刊行が開始される以前に発表されているものである。シュッテは我々の取り上げる問題についてシュライエルマッハーの旧約聖書観に、彼がハレ大学で吸収し取得したネオロギー神学の影響を見ようとする。<sup>(5)</sup> そこから彼の神学における「キリスト教信仰と旧約聖書」の論議が展開していることをふまえ、さらにフィヒテ、ヘーゲルとの異同を説明するのである。これに対してプロイスは納得せず反論を試みている。<sup>(6)</sup> プロイスはシュライエルマッハーの説教を詳細に検討したのち、その旧約観の欠陥が避けがたい結果を招来したと批判を述べている。

いま両者の議論していることの底流に、さきに言及したディルタイの判断が、無意識に前提されている。とりわけプロイスの場合にその傾向は強烈であると言わざるを得ない。いまシュライエルマッハーの生涯にわたる旧約聖書との取り組み方を、プロイスが敘述しているなかであげる事例の三つにふれて、その判断が果して適切であるかを吟味してみたい。すなわち第一は、シュライエル

マッハーの旧約との接觸は、ハレ大学でまなぶために先立ちヘルンフト派のニースキー大学予備校に在学した時から始まること、第二はそのヘブル語能力に問題あることがハレ時代の学友からの手紙(1807年)に言及されていること、第三にシュライエルマッハーが牧師試験を受けた際の成績が、ヘブル語について芳しくなかったことである。<sup>(7)</sup>

第一のものは、シュライエルマッハーが1794年に記した自伝のなかに見られる。<sup>(8)</sup> その内容はしかし、ギリシャ古典を読むことに情熱を燃やすと同時に、旧約聖書を読破する意気込みで取りかかり、エゼキエル書の難解さに閉口する話が登場するだけである。シュライエルマッハーは初めての学習体験をふり返って、必要な予備知識を持たずに猪突猛進した姿を自ら笑っているものの、「多くの楽しみを味わって、当時の状況ではよそで得られなかった、あらゆる収穫をものにした」と語っている。<sup>(9)</sup> 次に第二は友人シュパルデイグが1807年にシュライエルマッハーに送った手紙である。当時ベルリンの古典語高校教師であった友人が、シュライエルマッハーの説教に出て来るギリシャ語とヘブル語について、皮肉を込めて揶揄しているのが内容である。<sup>(10)</sup> それゆえプロイスがこの個所をとって、シュライエルマッハーのヘブル語知識の質を云々する例証に使うことは、見当ちがいが甚だしいものがある。自らも文献学者であった友人シュパルデイグの諷刺はそれとして受け取っても、ヘブル語の能力に関わる問題とは別の事柄と言わねばならない。さらに第三としてシュライエルマッハーの牧師試験合格に際しての成績の問題にふれたい。1790年にシュライエルマッハーが受けた牧師試験の成績は以下にするす9科目に及んでいる。それによればヘブル語と新約ギリシャ語は、同じ成績 gut がついている。無事に合格していることは確実であり、全体として見る限りヘブル語の成績のみが芳しくなかったことの例証にはなり得ないことが明白である。ちなみにそれらを転記してみたい。<sup>(11)</sup>

学校の勉学全般	sehr gut
書物の知識	gut
哲学的知識	recht gut

教会史	gut
ヘブル語	gut
新約ギリシャ語	gut
教養学	ziemlich
ラテン語による論文	sehr gut
ドイツ語による論文	vorzüglich

これらの事例を吟味する時に、いま我々には基本的な材料に即した判断と理解こそが、事柄の探究に必要かつ緊急であることを痛感するものである。

## 2. 説教における旧約聖書の個所について

シュライエルマッハーの旧約説教に関連して、これまで我々は従来から通念のように見なされ勝ちであった事柄に、訂正や補充が必要であることを、幾つかの事例にふれながら検討し指摘してきた。しかしその際にその旧約聖書にもとづく説教の範囲については言及することなく、むしろ問題の批判的吟味を持ち越してきた。この章ではその点についてまとめて考察したいと思う。

さてシュライエルマッハーが説教にあたって旧約聖書にふれて語っている場合にも、先ず我々は幾つものレベルがあることに留意せねばならない。説教にあたって旧約聖書の個所をテキストとしてシュライエルマッハーが語っているものばかりではなく、単に旧約の人物ないしは出来事を言及したり引用している場合があるに違いないし、さらに間接的な言いまわしをとって旧約にふれていることも十分に考えられるのである。これらはシュライエルマッハーが新約聖書の個所を説教のテキストとしている時には、旧約と新約の関係が取りあげられて言葉となって表されることが予想されるのであり、考慮の範囲に加えられて然るべきであろうと思う。

しかしシュライエルマッハーの説教全般にわたって、旧約との関わり方をくまなく調べつくすことは、今日もおこなわれていないのである。現在、引き続いて刊行がなされているシュライエルマッハー新版全集には、第三部門が説教にあてられており、それが完成した時には我々はこれまでよりも整った材料に

接することが可能となるであろう。それまでは我々は可能なかぎりの手段をつくして、シュライエルマッハーの旧約説教についてその範囲を明確にしておく必要がある。その意味において筆者は、シュライエルマッハーが旧約聖書の個所をテキストにあげている説教に限定して考察してみることが、現状では止むを得ないが、しかし最も賢明な道であると思っている。<sup>(12)</sup> すでに注(1)においてあげた参考文献の業績は、この方針のもとにそれぞれの仕事をしていることを見ても、それは現段階における研究上の制約から、かくならざるを得なかったものと判断する外はない。それゆえ最新の研究が示した若干の成果を含めて、以下に要点を報告することにしたい。なおその際にシュライエルマッハーのものとしてのこされ、印刷されている説教について考察していることを申し添えたいと思う。

これまでシュライエルマッハーの説教を全体としてまとめるにあたって、トリルハースが編集した一覧表が基本的なものとされてきた。それは W. Trillaas, Schleiermachers Predigt (Schleiermachers Predigt und das homiletische Problem, Leipzig, 1933), Berlin, 197.の末尾に付けられている。<sup>(13)</sup> トリルハースは彼が利用し得る限りの、印刷されているシュライエルマッハーの説教を集大成し、年代順に配列した一覧表を完成させたのである。その際にトリルハースが示した旧約聖書をテキストにする説教と、さらに新年礼拝と特別の記念礼拝において旧約が用いられていると指摘する説教とを、筆者の責任において集計した結果は、33の数に達していたことを報告せねばならない。<sup>(14)</sup>

シュライエルマッハーの新版全集を編集し刊行を続けていく80年代に、上記の事柄もまた記憶され調査と収集の仕事がなされてきた。そしてその一端は、1992年にメディングによって編集された Bibliographie der Schriften Schleiermachers のなかに公表され、これまで知られることのなかった材料を加えて、最新の成果として提出されたのである。<sup>(15)</sup> 本書は1795年から1990年までに印刷され刊行された、シュライエルマッハーの原文による著作を全て集大成して書誌としてまとめられたものである。したがってこれまで出版されてきた説教

類が含まれていることは当然であり、我々はその内容に、著作総覧のあとに付けられた、「説教リスト一覧」「説教カレンダー」、「聖書個所索引」の三つを通して、接することが出来るのである。<sup>(16)</sup> それによるとシュライエルマッハーの説教として刊行されているものを通して、こんにち合計583の数が確認できるのである。<sup>(17)</sup> またそのなかで旧約聖書の個所を説教のテキストとしてあげているものが、33であることを結論として導き出せるのである。

ここで上記の聖書個所索引をもとに、旧約聖書の個所と説教の年月日とを、以下に記すこととする。<sup>(18)</sup>

- 1 列王記上 8. 56-58  
1815年10月22日
- 2 歴代誌下 1. 10  
1800年1月5日
- 3 イザヤ書 55. 8-9  
1810年8月5日
- 4 エレミヤ書 17. 5-8 および18. 7-10  
1813年3月28日
- 5 ヨブ記 38. 11  
1824年1月1日
- 6 ヨブ記 42. 1-3  
1799年4月17日
- 7 詩編 1. 1-3  
1800年2月4日
- 8 詩編 6. 7  
1800年1月12日
- 9 詩編 7. 18  
1800年1月14日
- 10 詩編 8. 5-7  
1800年1月26日

- 11 詩編 10. 10-12  
1800年4月27日
- 12 詩編 10. 17  
1800年1月28日
- 13 詩編 12. 2  
1800年2月23日
- 14 詩編 12. 4  
1800年2月2日
- 15 詩編 13. 6  
1800年5月4日
- 16 詩編 14. 1  
1800年3月9日
- 17 詩編 15. 1-2  
1800年3月25日
- 18 詩編 15. 4  
1800年4月23日
- 19 詩編 19. 13  
1800年2月25日
- 20 詩編 24. 1  
1800年5月18日
- 21 詩編 26. 8  
1794年12月28日
- 22 詩編 32. 5  
1800年5月7日
- 23 詩編 68. 3-4  
1818年10月18日
- 24 詩編 90. 10  
1792年1月1日

- 25 詩編 100. 4-5  
1795年5月17日
- 26 詩編 143. 10  
1800年6月1日
- 27 コヘレトの言葉 1. 8-9  
1797年1月1日
- 28 コヘレトの言葉 3. 11-13  
1810年5月16日
- 29 コヘレトの言葉 7. 11  
1806年12月28日
- 30 箴言 14. 34  
1796年4月20日
- 31 箴言 14. 34  
1832年5月16日
- 32 箴言 21. 25  
1794年11月16日
- 33 箴言 22. 11  
1822年11月17日

以上にしるした旧約聖書箇所と説教の年月日をもとに、シュライエルマッハーの旧約説教の内容を把握するに際しての問題点を論ずることは、我々として次章にあらためて取り上げたいと思う。それに先立って、ここでは上記の一覧表を目にした際の第一印象とも言うべきことを、二つの点について述べるに留めたい。第一は、旧約聖書の箇所の中で詩編の多いことが目立ち、数の上でも半ば以上を占めている。第二は、全体で583に及ぶ多くの印刷された説教のなかで、旧約をテキストにしているものは全くの少数であるが、しかし確かに存在していることを見出すのである。それらの点を含めて、次章において我々の考察するところを述べて見たいと思う。

### 3. 印刷された説教の内容をめぐって

シュライエルマッハーは、牧師となって以来、その生涯の終わりに至るまで、説教者の任務を中断することなく、遂行していた事実を、我々はこの先で先ず念頭におく必要がある。すなわち1789年から1834年に及ぶ長い期間に一貫して継続したその説教活動の一環として、シュライエルマッハーの旧約説教が位置づけられる時に、我々はそれらの内容をより適正に把握することが出来るのである。

次にシュライエルマッハーが牧師として説教に当たる際に、採用した礼拝説教の種類や形態についても、考慮しておくことが大切であろう。例えば彼が最もながく活動したベルリンの三位一体教会では、早朝説教と主日礼拝とのいずれかを、日曜日ごとに同僚の牧師と交代しながら担当していた。その際にシュライエルマッハーは早朝説教では連続講解を行ない、主日礼拝では福音書・書簡・旧約からなるペリコーペには関係なく、聖書のテキストを立てて説教をしている。<sup>(19)</sup> 加えて彼が連続講解による早朝説教を行う場合に、新約聖書の諸文書のみが取り上げられているのは無視できないことである。典型的な例として1823年から1826年に及ぶ4年間、シュライエルマッハーは彼が最も敬愛したヨハネによる福音書を、継続して講解し説教を行ったことがあげられるのである。

そして更に、シュライエルマッハーが旧約聖書による説教を行っている頻度を見ると、決して一定の割合を継続して保っているとは言えないことに注目すべきである。ここでは前章に表示した33の説教について、それらを年代別に配列することによって、それを示すこととしたい。

1792年	1回
1794年	2回
1795年	1回
1796年	1回
1797年	1回

1799年	1回
1800年	17回
1806年	1回
1810年	2回
1813年	1回
1815年	1回
1818年	1回
1822年	1回
1824年	1回
1832年	1回

上記の配列から明らかになるのは、第一には1800年に17回もの旧約説教が集中していることである。ただしこれは前世紀80年代に、ベルリンの病院・福祉施設付牧師であったシュライエルマッハーの説教草稿が刊行されている事情によるものである。<sup>(20)</sup> 従ってこれは例外と見なす必要があると共に、あわせて印刷されている説教のほかにも、旧約による説教が行われている可能性は、この1800年ばかりでなく他の時期においても、否定できないことを考慮しておく必要がある。第二にシュライエルマッハーの生涯を通して見て行く場合に、18世紀の90年代における回数は、1810年以降のベルリンにおける神学教授・牧師として活動した後半生のそれにほぼ匹敵している。大雑把な表現を許したいただくならば、年数の具合を考えると頻度の点では、18世紀90年代の若きシュライエルマッハーが若干は高いと判断できるように思われる。

以上のような諸考察をもとに、ここで我々は全体としてシュライエルマッハーの旧約説教が、どのような状況で行われているかに注目してみたい。先ず、年の代わり目にあたる新年（もしくは年末）礼拝において、旧約聖書による説教が行われている例が目立っている。それらは合わせて5回にのぼっており、以下に表示する通りである。なおこれは、注（1）にあげた参考文献のうち、トリルハースが指摘していたものであったが、日付の確認などに問題をのこしていた。その点をあらためて、注（15）に言及したメディング編集による最新

のビブリオグラフィ（1992年）のよって訂正し、認識したものである。<sup>(21)</sup>

1792年1月1日

「人生の正しい評価について」

詩編 90.10

1794年12月28日

「公の礼拝の価値」

詩編 26.8

1797年1月1日

「未来の過去との類似性」

コヘレトの言葉 1.8-9

1806年12月28日

「最後の時は以前の時より悪くはないということ」

コヘレトの言葉 7.11

1824年1月1日

「すべての事に尺度を定め給う神」

ヨブ記 38.11<sup>(22)</sup>

次に目立つのは、いろいろな機会に記念礼拝が行われるに際して、旧約による説教がなされている例である。以下にそれらを列挙して読者諸賢の参考に供したいと考える。

1795年5月17日

「再び与えられた平和の慈しみを思い、神に対する感謝の提案」

詩編 100.4-5

（バーゼル平和条約に際して）

1810年5月16日

「仕事において喜びを持つことについて、我々は如何にそれを戦い取るか」

コヘレトの言葉 3.11-13

（悔改めの日に際して）

1810年8月8日

「我々も死去された皇后を記念しつつ、神に対する我々の思い出を如何に一つとなすべきか」

イザヤ書 55.8-9

（皇后ルイゼの死去に際して）

1815年10月22日

列王記上 8.56-58

ベルリン三位一体教会における説教

（ヴィーン平和会議に際して）

1818年10月18日

詩編 68.3-4

ベルリン三位一体教会における説教

（ライプチヒにおける諸国民の戦いを覚えての祝祭に際して）

1822年11月17日

箴言 22.11

ベルリン三位一体教会における説教

（プロイセン王フリードリッヒ・ヴィルヘルム3世の即位25年記念に際して）<sup>(23)</sup>

シュライエルマッハーが旧約説教を行うに際して、テキストとしてあげてい

る個所を全体として見る時に、何人の眼にも明らかになることに觸れておかなばならない。この点を本章の最後にあたり取り上げたいと思う。それはシュライエルマッハーの旧約説教において、テキストにしている個所は、詩編からと、箴言、コヘレトの言葉、ヨブ記などの知恵文学からとが、大半を占めており、他方、歴史書や預言書からの説教がそれと比べて少ないことが目立つのである。この事実が、これまで多く指摘され、論じられてきたことは言うまでもない。<sup>(24)</sup> 詩編が旧約説教の過半数に及ぶことはすでに言及したが、これを含めて如何にそうした諸点を解釈するかに関して、さまざまに指摘され問題とされてきた。そこではシュライエルマッハーの旧約聖書観とそれに基づいた説教者としての説教の態度とが関わってくることになる。ここで我々もその問題に觸れることにしたい。

周知のごとくシュライエルマッハーは改革派にぞくする牧師であった。礼拝において説教をするに際して、ペリコーペによって聖書の個所を考慮して選択する課題に直面させられている。この点は同時代のルター派にぞくする牧師においても、ペリコーペのもつ教会法規上の力に程度の違いはあるものの、基本的に共通のものがあつた。ただし改革派教会には礼拝における聖書朗読のペリコーペと結合することを拒否する傾向は強くあり、他の個所を選ぶことも奨められていたのである。<sup>(25)</sup> そのような状況のなかにあつてシュライエルマッハーは、説教のテキストを選択するのである。ここで我々はあらためて、ペリコーペの重点はあくまでも福音書であり、書簡がそれに次ぐ位置を占めるが、旧約は新約に至る道を備える場所のみを与えられていることを知っておく必要がある。この点でシュライエルマッハーの旧約聖書説教が、彼の印刷された説教のなかでは少なくともはあるが、たしかに存在する事実、むしろ積極的に受けとめるべき意味を持つと言える。説教者が聖書のテキストを自由に選ぶことは、シュライエルマッハーにとって当然であり少しも反論する必要性を持たない。彼はみずからの判断によって、旧約からは数少ないテキストを選ぶことを、意図的になしているのである。我々はその点を、シュライエルマッハー自身の言葉を通して、確認してみたいと思う。

シュライエルマッハーはベルリン大学神学部において6回にわたって実践神学の講義をしている。<sup>(26)</sup> その中で彼は礼拝論を展開するが、旧約聖書について以下のように言及する。

「……我々は我々の消極的な経典をそのまま承認し、次のように言うことが出来る。すなわち旧約聖書において本来的にユダヤ的なものが表われる度合いによっては、それはキリスト教的な叙述の範囲で役割を果たすには適しておらず、普遍的な人間の宗教的な叙述に役立つだけである。」<sup>(27)</sup>

さらに彼が説教を語る際には、旧約に対する新約の優位が、説教におけるテキスト選択にあつても述べられる。

「……かくして私は、旧約聖書からのテキストがおのずから後退して、新約聖書からのテキストが前面に出るといふこと以外の結果を、見出しえない。」<sup>(28)</sup>

このような判断に立ってなされた例として、シュライエルマッハーが1832年12月23日に行なつたアドベント説教があげられる。この時のテキストはヘブライ人への手紙3、5-6であるが、その説教題は説教集が後に刊行された際に「新しき契約と古き契約との間にある本質上の相違を創始者に即して敘述したもの」と書き直されているのである。<sup>(29)</sup>

## 結びにかえて

シュライエルマッハーの旧約説教については、これまで不信の念をもって迎えられるのが常であつた。バルトは1968年に出版された『シュライエルマッハー著作選集』にみずから「あとがき」を記して、彼のシュライエルマッハー観をまとめている。<sup>(30)</sup> そこにおいてバルトは次のような感想をもらしているのである。

「……既にシュライエルマッハーが、新約聖書の不可欠の積極的な前提として旧約聖書を扱うことが出来なかつたのではなからうか。」<sup>(31)</sup>

しかしここで我々は、バルトが同じ文章の別のところで、シュライエルマッハーが若き日から晩年に至るまで、説教者としての教会における責任を自覚し



て活動したことを高く評価しているのを注目したい。その際に以下の発言に注目したいと思うのである。すなわち

「そして、事柄としてそのことについてどう考えようと、シュライエルマッハーは『絶対依存感情』についてただ単に語ったばかりでなく、この感情を持っていた—むしろこの感情の方が彼を捕らえていたのである。」<sup>(32)</sup>

バルトはシュライエルマッハーが説教において、何を語るべきかが明解に把握されていたことを、評価し受け入れている。しかし他面、旧約聖書の位置づけに、バルトは疑いをいただいたままに留まっている。こうした微妙な揺れ動きは、シュライエルマッハーの旧約説教を考察する際に、壁となって立ちはだかっている。事態をありのままに見すえつつ、通念のように見なされ勝ちであった問題を新しく吟味し、掘り起こしながら研究が進められることを願うものである。

【参考文献】

H.-W.Schütte, Christlicher Glaube und Altes Testament bei Friedrich Schleiermacher, in: Fides et Communicatio. Festschrift für M.Doerne, Göttingen, 1970, S.291-310

H.D.Preuß, Vom Verlust des Alten Testaments und seine Folgen (dargestellt anhand der Theologie und Predigt F.D.Schleiermachers), in: Lebendiger Umgang mit Schrift und Bekenntnis, Stuttgart, 1980, s.127-160, bes. s.157ff. (Lit.)

R.Smend. Die Kritik am Alten Testament, in: Friedrich Schleiermacher 1768-1834. Theologe-Philosoph-Pädagoge, hrg. von D.Lange, Göttingen., 1985, s.106-128

W.Trillhaas, Schleiermachers Predigt (Schleiermachers Predigt und das homiletische Problem, Leipzig, 1933), Berlin, 1975<sup>2</sup>

W.Trillhaas, Schleiermachers Predigten über alttestamentliche Texte, in: Schleiermacher und wissenschaftliche Kultur des Christentums, hrg. von G.Meckenstock in Verbindung mit J.Ringleben, Berlin, 1991, s.279-289

【略語表】

- KGA Kritische Gesamtausgabe, Berlin, 1980ff.  
 KGA I/7, Der christliche Glaube nach den Grundsätzen der evangelischen Kirche im Zusammenhange dargestellt (1821/22), 3 Bde., 1980-1983  
 KGA V/1 Briefwechsel 1796-1798, 1985  
 Br.1 Aus Schleiermachers Leben. In Briefen, Bd. 1, Berlin, 1860<sup>2</sup> (1974 Nachdruck)  
 Br.4 Aus Schleiermachers Leben. In Briefen, Bd. 4, Berlin, 1863 (1974 Nachdruck)  
 CG<sup>1</sup> Der christliche Glaube, 1. Auflage, Berlin, 1821-1822  
 CG<sup>2</sup> Der christliche Glaube, 2. Auflage, Berlin, 1830-1831, 7. Auflage, 2 Bde., Berlin, 1960  
 SW Sämtliche Werke, 30 Bde., Berlin, 1834-1864  
 SW I/13, Die Praktische Theologie nach den Grundsätzen der evangelischen Kirche im Zusammenhange dargestellt, Berlin, 1850  
 BSch Bibliographie Schleiermachers. nebst einer Zusammenstellung und Datierung seiner gedruckten Predigten, Berlin, 1992

【注】

- (1) 以下の参考文献をあげておきたい。  
 H.-W.Schütte, Christlicher Glaube und Altes Testament bei Friedrich Schleiermacher, in: Fides et Communicatio. Festschrift für M.Doerne, Göttingen, 1970, S.291-310  
 H.D.Preuß, Verlust des Alten Testaments und seinen Folgen (dargestellt anhand der Theologie und Predigt F.D.Schleiermachers), in: Lebender Umgang mit Schrift und Bekenntnis, Stuttgart, 1980, s.127-160, bes. s.157ff.(Lit.)  
 R.Smend, Die Kritik am Alten Testament. in: Friedrich Schleiermacher 1768-1834. Theologe-Philosoph-Pädagoge, Göttingen, 1985, s.106-128  
 W.Trillhaas, Schleiermachers Predigt (Schleiermachers Predigt und das homiletische Problem, Leipzig, 1933), Berlin, 1975<sup>2</sup>  
 W.Trillhaas, Schleiermachers Predigten über alttestamentliche Texte, in: Schleiermacher und die wissenschaftliche Kultur des Christentums, hrg. von G.Meckenstock in Verbindung mit, J.Ringleben, Berlin, 1991, s.279-289  
 (2) たとえば L.Diestel, Geschichte des Alten Testaments in der christlichen Kirche, Jena, 1869 (Nachdruck: Leipzig, 1981), s.688  
 (3) W.Dilthey, Leben Schleiermachers, 1. Band, 1. Halbband, hrg. von M.Redeker, Berlin, (1870) 1970<sup>3</sup> s.40 より引用  
 (4) たとえば注(1)にあげた業績のうち、D.Preuß, a, a, O. s.158-160 の文献表は、丹念にまとめられているものの、その問題意識の基本に検討されていない一面を残している。  
 (5) 注(1)にある H.-W.Schütte. a, a, O. とくに s.294f. を参照していただきたい。  
 (6) H.D.Preuß, a. a. O とくに s.127-131, また s.127 Anm, 1 (シュütte論

- 文に対する「あまりに一方的なポジティブ評価」の主張が記される) および s.148 Anm, 110 を参照されたい
- (7) H.D.Preuß a, a, O. s.128f. 参照
- (8) Selbstbiographie, Aus Schleiermachers Leben, In Briefen, Bd, 1, Berlin, 1860<sup>2</sup>, 1974 (Nachdruck) s.1-10 に収録されている
- (9) Aus Schleiermachers Leben. In Briefen, Bd, 1. s.9 より引用
- (10) Aus Schleiermachers Leben. In Briefen. Bd, 4. Berlin, 1863. 1974 (Nachdruck). s.142 頁参照
- (11) Friedrich Schleiermacher, Kritische Gesamtausgabe, V. Abteilung. Bd, 1. Briefwechsel 1774-1796, Berlin. 1985. s.201 下段の解説より引用、なお H.Meisner, Schleiermacher Lchrjahre, H.Mulert, Berlin, 1934, s.47f. をも参照して頂きたい。
- (12) ここでシュライエルマッハーの説教に関連する事柄を全般的に述べることは避けたいと思う。それについては拙稿、シュライエルマッハーの死生観 - 愛児の墓前における式辞を通して -、『なぜキリスト教か、中川秀恭先生八十五歳記念論文集』、創文社、1993年、231頁-240頁、とくに232頁-233頁の敘述を参照して頂きたい。
- (13) 注(1)の参考文献にあげられている。a, a, O. s.211-223: Chronologisches Verzeichnis der im Druck erschienenen Predigten Schleiermachers を参照されたい。なお注(1)にあるトリルハースの最近の論文、Schleiermachers Predigten über alttestamentliche Texte (1991) a, a, O. Anm, 1, s. 280f. に見る自身による言及を比較されたい。
- (14) ただしこの数については、トルハース自身が注(13)にふれた最近の論文の個所で断っている通り、なお補充の必要があることは言うまでもない。それについては、すでに言及したプロイスの報告(a, a, o. s.127)では、約400の印刷されている説教のうち、16ないし17の旧約説教と19の旧約を基礎にした説教草稿を数えていることと比較して頂きたい。
- (15) Bibliographie der Schriften Schleiermachers, nebst einer Zusammen-

- stellung und Datierung seiner gedruckten Predigten, Bearbeitet von W. von Meding (Schleiermacher-Archiv 9), Berlin, 1992
- (16) a, a, o. Liste der gedruckten Predigten, s.229-330; Kalendarium der gedruckten Predigten, s.331-342. Bibelstellenregister. s.343-353 を参照して頂きたい。
- (17) a, a, O. s.12 参照
- (18) a, a, O. s.343 より引用
- (19) これについては W.Trillhas, Der Berliner Prediger, in; Friedrich Schleiermacher 1768-1834, Theologe-Philosoph-Pädagoge, Göttingen, 1985, s.9-23, bes. s.17 を参照した。
- (20) Predigtentwürfe von Friedrich Schleiermacher aus dem Jahre 1800, hrg. von Friedrich Zimmer, Gotha, 1887
- (21) W.Trillhaas, Schleiermachers Predigten über alttestamentliche Texte, in; Schleiermacher und wissenschaftliche Kultur des Christentums, hrg. von G. Meckenstock in Verbindung mit J.Ringleben. Berlin, 1991. s.279-287. bes s.282-284 を参照されたい。
- (22) Bibliographie der Schriften Schleiermachers, nebst einer Zusammenstellung und Datierung seiner gedruckten Predigten, Bearbeitet von W. von Meding (Schleiermacher-Archiv 9), Berlin, 1992, s.296, s.233, s.229, s.236, s.258f. 参照
- (23) W. von Meding. a, a, O. s.336, s.299f. s.238f. s.244 (二ヶ所), s.249f. の個所を参照
- (24) たとえば H.D.Preuß, a, a, O. s.132-s.136; R.Smend a, a, O. s.115-s.117; W.Trillhaas, Der Berliner Prediger 注(19参照) a, a, a, O. s.19 を参照されたい
- (25) これに関しては C.Albrecht, Schleiermachers Liturgik. Theorie und Praxis des Gottesdienstes bei Schleiermacher und ihre geistesgeschichtliche Zusammenhänge, Göttingen, 1963, s.92f. 参照

また s.53-s.55 をも比較されたい。

- (26) こんにちは我々は Die praktische Theologie nach den Grundsätzen der evangelischen Kirche im Zusammenhänge dargestellt, Sämtliche Werke, I. Abteilung Bd. 13 Berlin, 1850 によってその全容を知ることが出来る。
- (27) Fr, Schleiermacher, Die praktische Theologie, a, a, O. s.100f. より引用
- (28) Fr.Schleiermcher. Die praktische Theologie, a, a, O. s.238, また s. 291f. をも比較されたい。「新約聖書においては、より霊的な仕方で最高の本質が語られており、そこではキリスト教的なものが直接的に書き留められている。旧約聖書の表象は、キリスト教的な光に適した感性的な表象を通して、書き移されなければならない。」
- (29) Bibliographie der Schriften Schleiermachers a, a, O. s.277 参照
- (30) Schleier-Auswahl, Mit einem Nachwort von Karl Barth, hrg. von H.Bolli, München/Hamburg, 1968 バルトの「あとがき」は「シュライエルマッハーとわたし」(蘇訳)として、J. ファンクマイアー、神学者カールバルト、日本基督教団出版局、1971年、83頁-143頁に収録されている。
- (31) シュライエルマッハーとわたし、前掲書、114頁より引用、Schleiermacher-Auswahl, a, a, O. s.302 参照
- (32) シュライエルマッハーとわたし、前掲書、122頁より引用、Schleiermacher-Auswahl, a, a, O. s.305 参照

## 現代のバプテスマ論の一考察

—BEMを中心として<sup>(1)</sup>—

神田健次

### はじめに

昨年の8月3日~14日、スペインの歴史的な巡礼地サンチャゴ・デ・コンポステーラにおいて、世界教会協議会(World Council of Churches = WCC)の第五回信仰職制世界会議が開催された。<sup>(2)</sup> 前回の第四回世界会議が1963年であったので、実に30年ぶりであったこと、しかも第二ヴァチカン公会議(1962~1965年)以降大きく転換したローマ・カトリック教会が初めて参加した世界会議であったこともあり、注目された世界会議であった。

「信仰・生命・証しにおけるコイノーニアを目ざして」(Towards Koinonia in Faith, Life and Witness)、これが世界会議の主題であった。「コイノーニア」というギリシア語は、交わり、共同、共有、参与、連帯などの多義的な意味を内包しているが、この周知の概念が今回新たに脚光をあびたのは、カトリック教会の公式参与という新しい教派的広がり、またより多くの非欧米圏からの参与という地域的広がりによって由来している。しかし、構成面だけでなく内容面においても、この概念が従来のように教派間や教会内に限定されず、より幅広く人間共同体や被造世界との連関でその意義が問われた点に、その新しさがあるのである。<sup>(3)</sup>

このようなコイノーニア概念は、信仰・生命・証しの三つの局面で考察されているが、その三局面とは近年の信仰職制運動の研究成果を背景としたものである。即ち、「信仰におけるコイノーニア」では、ニカイア・コンスタンティノポリス信条(381年)の歴史的・現代的解明を意図した『一つの信仰を告白